

「血しおしたたる O Haupt voll Blut und Wunden」

パウル・ゲルハルト作詞（原詩はクレヴォーのベルナール又はレーヴェンのアールヌフ）

ハンス・レーオ・ハスラー作曲 ヨハン・セバスチャン・バッハ編曲

～讃美歌からの黙想～

2022年3月の「讃美の力」は受難節という事で、「血しおしたたる」が取り上げられました。

この曲はバッハが「マタイ受難曲」に使用したことで有名になり、その印象的な美しさは讃美歌の中でも白眉の作品と言えるでしょう。その歌詞のいきさつ、聖書箇所についての岡本牧師の緻密で深い解説、貴重な資料はこの曲を愛する者にとっては宝物です。

岡本牧師の説き明かしから紡ぎ出された様々な黙想を今回もエッセイとして書き記していきたいと思えます。

作曲者ハンス・レーオ・ハスラー

「血しおしたたる」の旋律は元々ドイツルネサンス期の作曲家、ハンス・レーオ・ハスラー（1562～1612）の「**Mein G'muth ist mir verwirret**（我が心は千々に乱れ）」という恋の歌が原曲です。

岡本牧師の解説にあったとおりバッハがその旋律を「マタイ受難曲」の中で「受難のコラール」として用いたので今日では原曲よりそちらの方が有名で、作曲者はバッハであると誤解されているくらいです。

原曲の作曲者のハスラーはニュルンベルクに生まれ、当時ルネサンス音楽の隆盛を誇っていたベネツィアに留学して、ベネツィア楽派の華麗で情感あふれる作風をドイツに持ち帰ります。そしてアウグスブルクやドレスデンの宮廷のオルガニストとして活躍して大きな功績を残します。彼自身はプロテスタントの信者でありましたが、この頃のドイツはまだカトリックの信者が多かったために、プロテスタントのためにも、カトリックのためにも宗教曲を作曲しています。多くの世俗曲や宗教曲の作曲家であったハスラーの作品で今日一番有名なのが、讃美歌としてアレンジされた「恋の歌」であるというのが、何とも不思議でユーモラスにも感じます。

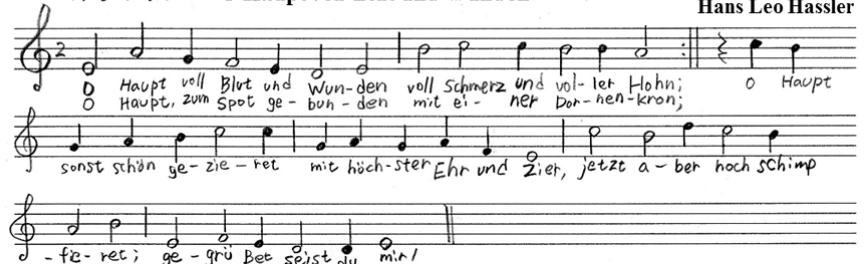
ハスラーの恋の歌に岡本牧師の解説にあったようにゲルハルトが讃美歌としての歌詞を作詞しました。後に「マタイ受難曲」においてバッハがそれをソプラノ、アルト、テノール、バスの4声のコラールに編曲しました。

（譜例1）は編曲前のハスラーの作曲したオリジナルのメロディーによる讃美歌です。（譜例2）のバッハが編曲したもの（ここで

（譜例1）

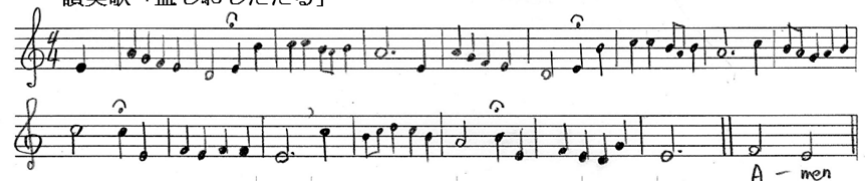
オリジナル “O Haupt voll Blut und Wunden”

Hans Leo Hassler



（譜例2）

讃美歌「血しおしたたる」



はメロディーのみを書き出しました)と比べると3拍子系であるためか、かなり情緒的な旋律に思えます。ドレスデンの宮廷でハスラーの後任でオルガニストの地位についたのがハインリヒ・シュッツ(1585~1672)です。ハスラーと同じくシュッツはドイツの偉大な作曲家で、後世に大きな影響を与えました。シュッツもまた「マタイ受難曲」を作曲しましたが、それはバッハの「マタイ受難曲」とは違い、声楽だけの様式で書かれています。全曲の演奏に3時間かかる長大なバッハの作品に比べて、コンパクトなものとなっていますが、深く美しいもので、宗教音楽史上大変重要な作品です。ハスラー、シュッツ等々のドイツ音楽の脈々とした流れを経てシュッツの生まれたちょうど100年後の1685年にアイゼナッハにヨハン・セバスチャン・バッハが誕生します。

「マタイ受難曲 BWV244」

バッハは音楽家の一族の中に誕生します。早くから才能を現して18歳の頃にはザクセンの宮廷楽師となり、次いでアルンシュタットの新教会オルガニストに就任します。未だにクラシック音楽の世界では、これまで存在したいかなる作曲家もバッハを超える人はいないというくらい、バッハの音楽の才能と能力は卓越していました。その音楽は非常に緻密で数学的であり(マタイ受難曲においても黄金分割、フィボナッチの数列、13という象徴的な数字を表すコラールの配列、三位一体を表す音型、十字架音型等々)まるで偉大な建築を見るように、構造的にも計算し尽くされ、洗練されたものです。例えどんな小さな曲であってもバッハの作品のどれもが一分の隙も無く構築された神殿のように見事に整然とした構成を持っています。そしてその中でも最も偉大な作品の一つが今回の讃美歌が使われた「マタイ受難曲」です。

「受難曲」の歴史は古く、10世紀以前から「マタイ」「マルコ」「ルカ」「ヨハネ」のそれぞれの福音書からイエスの受難の物語の朗唱が行われていました。それに次第に登場人物にそれぞれ旋律が作られ、重唱、楽器の伴奏が加わるようになります。バッハの「マタイ受難曲」はその頂点の作品だと言えるでしょう。

「マタイ受難曲」の中で讃美歌「血しおしたたる」はバッハによって和声が付けられ「コラール(ルター派教会で会衆によって歌われるもの)」として5回使われています。

編成

「マタイ受難曲」の声楽部分は以下のような編成で作られています。

合唱(ソプラノ、アルト、テノール、バス)

ソリスト: ソプラノ(独唱、女中、ピラトの妻)

アルト(独唱、証人)

テノール(エヴァンゲリスト、独唱、証人)*エヴァンゲリストは物語の進行役

バス(イエス、独唱、ユダ、祭司、ペテロ、カイファ、ピラト)のコラール

「血しおしたたる」の使用箇所

次に「血しおしたたる」が受難曲の、どのような箇所で行われているのかを、あげてみます。訳詩は、岡本牧師は杉山好氏のものを用いられていましたので、こちらでは皆川達夫氏の訳詩を使わせていただきます。両氏のものを合わせて味わっていただくと幸いです。

1. 最後の晩餐の後、オリーブ山で「今夜あなた方は皆わたしに躡くであろう」とイエスが弟子たちに言い、続いてイエスがよみがえる事を語ったことを朗唱した後

我をみとめたまえ、我が守り人
我が牧者よ、我をいだきあげたまえ、
全ての善のみなもとなる汝より
あまたの幸ながれ出でぬ。
汝がみ言葉は、うましき糧となりて我をはぐくみ、
汝がみ心は、あまたの天国の幸を我にもたらしぬ。

原詩 第5節 嬰ハ短調

2. 「今夜鶏が鳴く前に 3 度私を知らないと言うだろう」とイエスがペテロに言う場面をエヴァンゲリストが朗唱した後

我、汝がみもとにとどまれん
我をかるんじ汝が胸くだけでたもうな、
たとえ汝が胸砕くとも、汝が胸砕くとも
我汝がみもとより離れざらん。
汝がみ胸に血失する時、
汝が最後の時も
我とどまりて
我が胸に汝を抱かん

原詩 第6節 ハ短調

3. 総督ピラトがイエスに「ユダヤ人の王か」と問う場面の朗唱の後

汝が道、汝が心、
さえぎるものを主に委ねよ。
天を続べたもう主の守りこそ たよるべきもの
雲も風も、汝が歩むべき行く手を示し、
道を開かし

(ここだけゲルハルトの詩篇コラールからの歌詞の引用) ロ短調

4. イエスがつばきをかけられ、葦の棒で頭を叩かれた事をエヴァンゲリストが朗唱した後

おお、頭は血にまみれ、傷をおい、
苦しみと嘲りをうく

おお、主のみ頭は
嘲りのいばらの冠をいただく
かつて栄光と誉にかざられし主のみかしら
今はいたく ののしられたり。
われはかしこみ、きみをあおぐ。

かつて全宇宙を恐れしめたる汝のけだかきみ面、
つばきかけられ けがされたり。
かつて清くかがやきし、主の眼光をかくも青ざめ、
恥にけがせしものは 誰ぞ

原詩 第1節、第2節 ニ短調

5. イエスが息をひきとられた時

いつの日か、我死なん時、
主よ、我よりはなれたもうな。
我死に苦しまん時、我にみ姿を見せさせたまえ。
我が心にいたくうれう時、
汝のうけし苦悩により、
我をば怖れより救い出したまえ。

原詩 第9節 フリギア調

(以上皆川達夫氏訳)

またこのコラールの後、神殿の幕が裂け、地震が起こり…というところでは、エヴァンゲリストと合奏の通奏低音（オルガンを始め低音楽器）が交互に激しく上行下降を繰り返して天変地異を表します。このように、「血しおしたたる」は、「マタイ受難曲」の全部で13曲あるコラールの内の5曲を占め、全体の中心的な役割を果たしています。

フリギア調

このコラールは4回目までは嬰ハ短調、ハ短調、ロ短調、ニ短調、で作曲されました。調というのはそれぞれ固有の意味と雰囲気を持っています。

特筆すべきは、2回目に登場するのがハ短調、ペテロがイエスにこれから自分がイエスを裏切る事を予言されたところです。ハ短調は運命的な強い性格を持つ調です。主を裏切り、それを重荷として生きていく運命と苦悩がハ短調と言う調性で表されています。

また、3回目のロ短調は「死」を表す調です。イエスが捉えられ、ピラトの前に引き出されて次第に死に向かっていく流れを表しています。

そして5回目、「マタイ」のクライマックスに出てくるのがフリギア調です（譜例3）。フリギア調はハスラーが作曲したオリジナルの調と同じです。中世、ルネサンス時代は長調、短調ではなく、「旋法」という

概念で曲が作られていました。カトリック教会で歌われていたグレゴリオ聖歌の旋法（旋律体系）の第 3 番目の旋法がフリギア調で、デウテルスと言われ、宗教的な神秘、畏れ、憧れを表す調です。

フリギア調というのは音楽理論的には実はハ長調と真逆の音の並び方の調です。ハ長調の特性が穏やかで安定的で幸福な調であるとしたら、その真逆の音階でできた調性で、バッハは、イエスの死によってもたらされたこの世とは違う価値観の世界、即ち神の世界への扉をフリギア調を使って表したのではないかと思います。

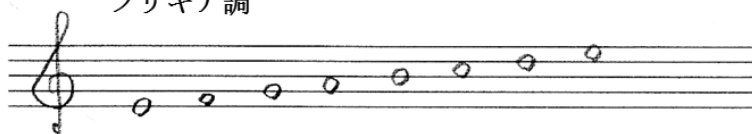
また、前述のようにイエスの死に際して起こった天変地異を招いた調だとも言えるのではないのでしょうか。

また、フリギア調は非常に陰影に富み、魅力的な音階である事からハスラーは世俗曲の恋の歌にもこの音階を使用したのでしょう。讃美歌の作詞者であるゲルハルトもその旋律が人々に愛され人気の高い旋律であることで、自分の詩をその旋律に乗せたのです。

フリギア調は現代においても尚、クラシックだけでなく様々な分野の音楽に使われています。

(譜例 3)

フリギア調



聖トーマス教会

バッハが「マタイ受難曲」を初演したのは 1727 年、ドイツのライプツィヒにある聖トーマス教会です。バッハはこの教会で 1723 年から晩年まで教会楽長を務めました。

聖トーマス教会はルーテル派の教会で、アーチ型の天井を持つ美しい教会です。

私が訪れた時は平日の午後でしたので、観光案内にあるような照明は無く、豪華な装飾のあるカトリック教会に比べると、適切な表現であるかは分かりませんが「質実剛健な」建築に感じました。教会の内部にはバッハが埋葬されています。その時は日程が合わずにしばしば行われている教会のオルガンコンサートには行けませんでした。教会の中にいる時に、ちょうど修理中だったバッハが使用していたオリジナルのパイプオルガンの音が、突然大きく鳴り響きました。それはあたかも聖堂を震撼させるような圧倒的に大きく深く力強い音でした。およそ 300 年前の 1727 年にこのオルガンの響きで初演した「マタイ受難曲」、特にイエスの死の後のエヴァンゲリストと通奏低音の掛け合いは凄まじい響きとなって聴衆に畏れを抱かせる効果があったのではないかと想像させます。

いつか是非この教会で、オリジナルのパイプオルガンで演奏される「マタイ」を聞いてみたいと思っています。



聖トーマス教会



バッハ像



バッハの墓

メンゲルベルクの歴史的な演奏

1939年4月2日「棕櫚の日」にオランダ、アムステルダムコンセルトヘボウ（コンサートホール）で「マタイ受難曲」の歴史的な演奏が行われました。アムステルダムコンセルトヘボウ管弦楽団の演奏で、指揮はウィレム・メンゲルベルク（1871~1951）です。メンゲルベルクはオランダが生んだ20世紀前半の偉大な指揮者の1人です。幼少期より才能を発揮してドイツのケルンでベートーヴェンの孫弟子に師事、ベートーヴェンの作品やバッハの受難曲の研究を熱心に行ない、ラフマニノフやマーラー、リヒャルト・シュトラウスなどの作曲家達と親交を持って、彼らの作品を「自分自身よりよく表現している」と感嘆させるような緻密に研究しつくした演奏をしています。オランダ国内の人气が常にトップであり、音楽界だけでなく一般の人々にも知名度が高い指揮者でした。

その年の前年の1938年3月、ナチスドイツがオーストリアを併合、ドイツは反ユダヤ主義を高めていきます。次いでチェコのズデーテン地方に侵攻、ズデーテン地方のドイツ系住民が虐待されているという強烈なプロパガンダのもとにズデーテン地方をドイツに割譲するように要求します。ヒトラー、ムッソリーニ、イギリス首相チェンバレン、フランス大統領ダラディエらの参加した「ミュンヘン会議」によって「これが領土要求の最後」というヒトラーの要求を呑んでズデーテン地方はドイツに併合されます。しかしヒトラーの野望は止まりませんでした。

メンゲルベルクによる歴史的な演奏は、ヨーロッパ中が再び世界大戦に向かう予感に緊張して、恐怖におののいていた時の演奏でした。演奏の始まりから指揮者、演奏者、聴衆が熱を帯び、悲劇への予感による緊張感が極限にまで高まっていくのが録音からも伝わってきます。そしてライブ録音には後半のソプラノのアリア「神よ、憐れんでください」にさしかかった時に聴衆のすすり泣く声が録音されています。そして声にならない祈りや嘆



アムステルダムコンセルトヘボウ

きが会場に満ちているのが伝わってきます。

この年の 9 月、ドイツはポーランドに侵攻して史上最悪の死者、犠牲者を出した第 2 次世界大戦が勃発します。オランダは 1940 年 5 月ドイツ軍に占領され、ナチスドイツはユダヤ人やレジスタンス運動に対して、激しい弾圧を加えます。1934 年にユダヤ人への迫害を逃れてドイツからアムステルダムに移り住んでいた「アンネの日記」の著者アンネ・フランクはユダヤ人狩りで強制収用所に送られて 1945 年に亡くなりました。

メンゲルベルクはナチスの占領時にはヒトラーの腹心の幹部でプロパガンダを指揮したゲッペルスに気に入られて、ベルリンフィルハーモニー管弦楽団に客演で招かれるなど、時流に乗った生き方をしましたが、終戦後は戦犯として追放されて、表舞台に戻る事なく失意のうちに 1952 年に世を去りました。



アンネ・フランクの家

終わりに

今、世界は歴史のフィルムが巻き戻されたように繰り返される事への怖れと、緊張感の中にあります。今はメンゲルベルクが「マタイ受難曲」の歴史的演奏を行った時と同じ受難節です。

このエッセイの終わりに讃美歌「善き力に我囲まれ」の作詞者で、ナチスに対する地下抵抗運動に参加して、後にヒトラー暗殺計画に加わって 1943 年に処刑されたディートリヒ・ボンヘッフアー牧師の言葉を挙げたいと思います。ボンヘッフアー牧師の思いが奇しくもアムステルダムコンサートへボウで行われた演奏会の聴衆の思いと同じであることを深く心に留めたいと思います。

「激情の嵐、運命に抗う反抗の嵐…おそらくかすかなため息とすすり泣きもその中に含まれるであろうが…それが成長し、大きくなったものが、ほかならぬわれわれを讃美する歌であり、われわれの情熱、愛、憎しみ、そして我々にみなぎる力を讃美する歌となったのではないか…バッハは自分の全ての作品の上に“神に栄光あれ”と書き記した。このことは、まさに彼の音楽が、神への絶え間ないほめ言葉以外の何ものでもないという事を示している。（「ボンヘッフアー1日1章 主のよき力に守られて」村椿嘉信訳）

T.N.